

2021年新春TOPインタビュー

道路②



大成ロテック 西田 義則 社長

中小水力発電運用へ前進

「さまざまな形でコロナの影響を受けた年だった」と2020年を振り返る。「民間工事はプロジェクトの中止や延期といった形で影響が出ており、官庁工事でもゼネコンの工事が止まったことで当社への引き渡しが遅れるようなこともあった。21年3月期の上期業績は目標を下回ったが、下期に入り官庁を中心に受注を伸ばしているので、通

期では目標を達成したい」と語る。また、「コロナだけではなく、7月の豪雨のような自然災害も激甚化・頻発化しているが、そうした状況下でもわれわれの事業は継続が求められる」と社会的責任の大きさを強調する。

21年3月期は現中期経営計画の最終年でもある。▽さらなる収益力の向上▽働き方改革・生産性革命▽人材の獲得および育

このうち、新事業では、再生エネルギー関連事業の、中小水力発電について、大成建設創業者の大倉喜八郎出生地の新潟県新発田市を初弾案件に選定し、運用開始に向けて1歩前へ踏み出した。「工場でアスファルト合材をつくる際、かなりの量の

成強化▽新しい事業分野への取り組み強化▽安全・環境・品質トラブルの撲滅▽グループ連携強化――の6項目を方針に掲げて各種施策を進めている。進捗については「新型コロナウイルス感染症の流行などもあり厳しい状況ではあるものの、コロナ

CO₂を発生させている。燃料のガス化などで排出量自体を削減するとともに、再生可能エネルギー事業に取り組むことで、トータルでのカーボンニュートラル化を実現する」と意図を説明する。

22年3月期については、6月15日には創立60周年の節目を迎えることから「大倉喜八郎の『進一層』（困難に出会ってもひるまずに一層前に進む）」という言葉を胸に、これからの10年を考えていきたい」と語り、まずは中堅社員を中心としたチームで今後のありたい姿などを模索している。また、「新規事業の成果が表れる年にしたい」と述べ、中小水力発電の事業開始や中国やベトナムでの海外事業のさらなる展開を目指す。

策定中の新中期経営計画については、「コンプライアンスの徹底に加えて、SDGs(持続可能な開発目標)や環境問題を前提として、業績を成長させていく。その中で、省力化や生産性向上のためにDX(デジタルトランスフォーメーション)も取り入れ、会社が変わっていかなくてはならない」と方向性を示す。